

リレー随想

結婚したばかりのころ、それ以前からではあったが、家内はトルストイ研究家である北御門二郎さん(現在八十七歳)の大ファンだった。

「水上村の湯山に、北御門さんという素晴らしい人がいる。私はこの先生の人間性は好きだけど、作品の方は難しくよく分からない。日本で一番素晴らしい翻訳、という賞をもらっていらっしやるから、読んでみたい」。

真新しい、あまり読んだ気配のないそれらの本は、トルストイ三部作と銘打って、東海大学から出版されていた。「どれがいいかな?」。家内に聞くと「どうせなら、一番長いのがいいよ」。そう言っただけでくれたのが、「戦争と平和」だった。読み切れるだろうかと思っただが、終わって、鳥肌が立つほどの感動を覚えた。

アンドレイを中心にして、父、妹のマリア、息子のニコレンカ。これらの人間関係が、私にとって他人事ではなかった。「アンドレイ、あなたは誰に対して優しいけど、何かしら考え方

湯山行き

土地家屋調査士

田口 一法さん



に傲慢なところがあってよ」。

アンドレイに対する、妹マリアのこの言葉にドキッとすると人は、決して少数ではないと思う。

三月の結婚式には北御門さんにも来ていただいたいて、あいさつをお願ひした。桜の時期に氏の家を訪ねたが、このときのことには「今までいろんな人がここに来たけど、新婚旅行にわが家を

選んでくれたのは、あなたたちが初めて「お誘いいただきました」。「あれは新婚旅行だったのかなあ...」。当時、そんなつもりはなかったが、多分そうだったのだろう。

先日、久しぶりに北御門さん方を訪ねて、湯山に行った。「わざわざ、この老人のために...」とおっしゃっていたが、「昨年前に来たときよりは顔色も良く、随分元氣になられたなあとうれしかった」。

「ごぶさたしております。お元氣でしたか?」。手をついてあいさつすると、「何だか夢のようです」と奥さんの「モさん(八十七歳)も、ニコニコしながら迎えてくださった」。

有機栽培で採れたスイカは、実がしっかりとまっておいしかった。日帰りであまりゆっくりもできなかったが、北御門さんの長男・すすぐさんはじめ、みなさんお元氣で、一緒に行った私の家内や子どもたちもそれぞれに、ご家族との話を楽しんだ。

氏の住まいは、水上村の中でも奥まったところ。実際に住めばいろいろと苦勞もあるのだろうが、訪ねるたびに、いいところだな、またみんなの顔を見に来たいな、と、帰りしなにはいつも元氣をいただいて帰っているような気がしている。

(熊本市花園、45歳)